

心のふれあい

大樂治男

午後十一時二十分、電話のベルがけたましい音を立てる。受話機をとると「先生、うちの子がいません。まだ帰つてこないんです。どうしましようどうしたらよいんでしょう」と必死な声である。一瞬ギクッとし「落着いて事情を話してください」。

これがS子との一年間にわたる忘れられない触れ合いの始まりである。

この日、S子はなんの前触れもなく何物かにとりつかれたようになつた。母親の財布で福島市方面に旅立つた。母親の財布から五千円ほど抜き取つて家出の途中タクシーの運転手が不審に思いいろいろ事情を聞いたが納得できず、連れもどしてくれたのが、午前四時三十分であつた。

母親は、若くして夫と死別し、一人でS子の姉と三人の生計を支えていた。S子は母に悩みを打ち明けることもなかつた。担任であつた私にも、平凡で静かなS子は、特に目立つ存在ではなかつた。

この日を境にして、S子の生活は全くその様相を変えてしまつた。

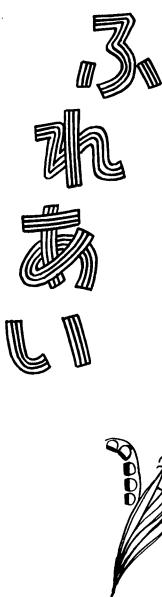
一二、三日、S子の態度を見るにした私は、不安もあつたが明日は登校

するように言って帰宅した。翌日S子は登校しなかつた。その翌日も…。三、四日たつて家庭訪問をすると、戸を引き、部屋の中でふとんをかぶつていた。会つてみると、なにも話さず上目使いで見る顔が無気味であった。

「明日は出てこいよ。こんな薄暗い部屋の中にいるよりも、明るい日光の中で思つて有分あはれてみろよ。クラスのみんなも心配しているし、T子も心配していたぞ」「…」「みんなには少し体のぐあいが悪いと言つておいたよ」「…」「こんな調子の家庭訪問が、登校前、授業の合間、放課後とか月に五十回以上も続いた。しかし、依然として登校拒否は続いた。

家出後、十数日たつて母親は泣きわめくS子を精神医に連れて行き診察を受けた。その結果、精神不安定であり更に、二か月後には自閉症の診断が下つた。私は精神医に最良の治療法はないかと尋ねたが、答えは以外と冷たかった。本人の意志によるほかはないよし、いろいろやってみようと考え

教育隨想



これは効果があつた。見舞いは医薬に勝るものであつた。友達の無遠慮さから、部屋の雨戸を開かせ、友達のこと授業のこと、担任の悪口などおもしろく話したららしい。しかし、次の日になると再び元の状態にもどつてしまつた。

早くも三ヶ月が過ぎ、中学三年の修学旅行が迫つた。私も多忙にかこつけ訪問せずにいた。ところが、母親からの電話で「先生は私を忘れたのか、いやになつて来ないのだろう。絶対に学校なんか行くものか」と泣いていると言う。このとき「はつ」となにかに突かれた感じがした。そうだ、忘れていないS子がいたのだ。よし修学旅行に連れていくつてやれ。責任は、おれが一人でとればよいと心に誓い、その日に学校長、学年主任の理解を得て家庭訪問をすると青い顔を出し微笑していく。どうだ、修学旅行に行くか「クラスの友達は『全員そろつて行けよ』といな」と言つていたぞ」「だつて長く休んだから恥ずかしい。けれど修学旅行には行きたい」と初めて口をきいた。

月曜日の朝、友だちに助けられ、晴れとした顔で校門をくぐつた。級友たちの拍手が響きわたつた。それからは全く欠席もせず、学習の遅れを取りもどし、高校入試にも合格した。新しい高校制服を身につけた彼女に、これからが本当の人生だ、強く生きててくれよと心から声援をおりたい。

(いわき市立好間中学校教諭)